

HIROSHIMA KEIRIN 通信



ひろしまけいりんホームページ
http://www.keirin.econ.city.hiroshima.jp/

発行 広島市競輪事務局 〒734-0011 広島市南区宇品海岸三丁目6番40号
TEL (082) 254-5445 FAX (082) 251-2382

ひろしまけいりん

検索

競輪のあるしあわせ

先人の魂に触れる 第26回 古田泰久記念杯 1月16日(水)～18日(金)

古田泰久記念杯は、広島を生んだ名レーサー・故古田泰久氏の偉業をたたえ、昭和63年に創設されたタイトルで、現役選手にとって名誉ある賞として位置づけられています。競輪史にさんぜんと輝く古田氏たちの勇姿や当時の競輪に思いをはせながら、今の競輪を観戦してください。あの頃、競輪場に通った方もそうでない方も、お誘い合わせてのご来場をお待ちしています。

入場料50円 開門 午前10時 サービスセンター前売 午前7時半～9時

古田杯のレース中継	CS放送 スピードチャンネル 16日・17日 390・690CH 18日 391・691CH	インターネット 「ひろしまけいりんホームページ」－「ライブ中継」
-----------	--	----------------------------------

故古田氏の関係者に聞きました

静かな豪傑・古田泰久氏と当時の競輪を語り継ぐ

松本勝明氏

歴代1位(1,341勝)、日本名輪会会長
松本氏は、前人未踏の1,341勝を誇る競輪界の神様の存在。人格、生活態度、練習姿勢は選手の手本となっていました。

昭和 3年 3月5日 京都府木津川市生(84歳)
昭和24年 6月 選手登録
昭和24年 7月 初出走(鳴尾競輪)
昭和24年 8月 初勝利(鳴尾競輪)
昭和37年 世界選手権出場(イタリア)
昭和40年12月 1,000勝(後楽園競輪)
(主なタイトル)
昭和29年・30年 日本選手権競輪
昭和27年・29年(第6回・第7回)・31年・33年
全国都道府県選抜競輪

「古田さんを初めて見たのは、昭和24年の松山競輪場でした。その後、何度も競い合いました。お互いに先行するタイプだったので、古田さんの走りを研究して、どうすれば勝てるかを考えていました。古田さんは、割と大きいギアを使用していました。札幌、函館、京王閣の開設記念競輪で競ったのが印象にはあります。彼のホームの広島競輪場ではとても手強く気合いも十分で、広島では勝てないなという感じでした。

古田さんは静かな豪傑というたまたまいで、素晴らしい選手だと私は認めていました。対抗心よりもお互いに切磋琢磨するような関係だったと思います。

当時の競輪は今のようによく環境ではなかったですね。走路面はでこぼこだったり、舗装されていない土の走路もありました。滑りやすかったし、コーナー部分の傾斜もそれほどついておらず、走りにくいところもありました。フェンスやスタンドは木製であたかも牧場を思わせる雰囲気でした。自転車は、リムが木製だったり、タイヤのゴムが厚く今よりずいぶん重量もありました」



▲現役時代の松本氏
松本氏は、1月18日に広島競輪場に来場。ピギナスステーション(午後2時頃から正面入場口付近で開催)などにゲスト出演します

吉田 実氏

歴代2位(1,232勝)、日本名輪会会員

吉田氏は、度重なる落車禍を乗り越え、鉄人と呼ばれました。12歳から自転車競技を始め、世界選手権には3度出場しています。

昭和 9年 5月1日 愛媛県西条市生(78歳)
昭和25年 7月 選手登録
昭和25年11月 初出走(門司競輪)
昭和25年12月 初勝利(小松島競輪)
昭和34年 世界選手権出場(オランダ)
昭和48年 8月 1,000勝達成(甲子園競輪)
平成 6年 4月 登録消除
(主なタイトル)
昭和33年・35年 日本選手権競輪
昭和35年・36年 オールスター競輪
昭和37年・38年 全国都道府県選抜競輪



昭和33年日本選手権競輪決勝戦の様子。ゴール手前約5mで接触され後輪が破損しながら1着で滑り込んだ。▲

「古田さんとは、私の兄(競輪選手)が懇意だったことから知り合いになり、かわいがってもらうようになりました。広島に行くとき飲みにも連れて行ってもらいました。お互いお酒は好きで、古田さんはビールを好んで飲んでいました。

体格がよく、当時、ギア倍数の主流は3.5倍程だったのですが、4倍以上のギアを使っていました。人物も大きかった。器の大きい人でした。

古田さんは練習をととても大事にしていました。今のように科学的なトレーニング方法はなく、とにかく乗り込む、長い時間苦しむことを重視していました。レースのスタイルは先行が主体でした。強い選手とはとにかく先行していました。勝利への執念・こだわりは強く、ここという時の集中力も素晴らしかった。何度も一緒に走ったが、よく憶えているのは、昭和35年の後楽園競輪場での日本選手権競輪決勝戦で、古田さんが先行し私が追走する展開のなか最終的にはゴール前でかわして優勝(古田さんは2着)できたのですが、古田さんはレース後に「お疲れ様」と爽やかに声をかけてくれました。

年上の古田さんに対しては、ライバル心のような感情は持っていなかった。古田さんは兄のような存在だったのです。引退後も名輪会の活動で、よく一緒に各地を訪れました。亡くなられる2カ月前には一緒に高松競輪場に行っていたので計報にはたいへん驚きました」

古田義雄氏

歴代42位(753勝)

古田義雄氏は古田泰久氏の弟で、元競輪選手。兄を追いつ競輪界入りし、通算700勝以上をあげました。

昭和 7年 7月13日 広島県福山市生(80歳)
昭和25年 選手登録
昭和25年 3月 初出走
昭和48年12月 登録消除



▲昭和31年大阪中央競輪場での優勝時の様子

「兄(泰久氏)と2人兄弟で、歳は二つしか離れていなかったのですが、兄は柔道をやっていて子どもの頃に一緒に遊んだ記憶はほとんどないですね。あまりよくしゃべるタイプの人ではなかった。体格が非常によく、存在感があって、兄からはいろいろと指示されて、私は素直に従っていました。父のような感じだったかもしれません。

競輪選手になったのは、兄の影響です。兄の姿を見て、自分も、よしやってやろうと決意しました。練習はよく一緒にしていました。朝5時に出発して、交通量の少ない湯来町まで自転車で行って行ったりしていました。練習は真面目に取り組んでいました。おかげで今でも早起きですね。競技のことで、兄から直接指導を受けたことはなかったですね。人の指導よりも自分の鍛錬に集中したかったのではないかと思います。私生活では、私に対してもそうだったのですが、周りの人の面倒をよくみていたと思います。

私は700勝を達成したのち、41歳で引退しました。その時は誰にも相談せずに一人で決断したのですが、後で兄には叱られました。『やめるのは、まだ早い』と。阿品台にある兄の墓には、折に触れ参っています」